

ロールシャッハ法と「穴」のある風景構成法に見る内的体験

—自閉スペクトラム症のアセスメントを視点として—

21014FRM 田代 良太郎

キーワード：自閉スペクトラム症 ロールシャッハ法 「穴」のある風景構成法

I.問題と目的

1.不登校と発達障害

文部科学省が行った、令和2年度の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果」によると、2020年度における不登校数は、中学生が132,777人、高校生が43,051人である。そのうち中学生72,299人、高校生11,855人が前年度から不登校を継続している。武井ら(2009)は、高機能広汎性発達障害と診断された患者のうち、44.3%が不登校状態であると報告し、一般の不登校の割合は3.21%(宮尾, 2019)と比較すると非常に高いことが分かる。

2.診断上の問題

後藤(2012)は、「専門機関で自閉スペクトラム症(以下ASDとする)と診断を受けた子の診断に関して、正しいと判断できるのは5割程度であり、実質的に、早期関係性障害つまり母子関係の希薄さをベースにして発展したアタッチメント(愛着)障害(以下ADとする)の子が圧倒的に多い」と述べている。また、杉山(2018)もASDとADの多くは似たような症状を示すため、診断は難しいと述べている。

3.内的体験に見る対象理解の視点

後藤(2005)は、正しい理解が正しい対応を生ため、周りの世界をどのように体験しているかという内的体験様式に目を向けることが重要であるとしている。

4.本研究における目的

本研究では、ASSQを用いてASD群を操作的に定義する。そして、ASD群と非ASD群に分類された両群のロールシャッハ法(以下、口法とする)及び「穴」のある風景構成法(以下LMT-Holeとする)について、群間の特徴を検討していく。群間に特徴が見つかれば、ASDのアセスメントに有用な示唆が得られると考えられる。

II.方法

1.研究協力者

不登校特例校であるF校に在籍する中学3年生の男子生徒2名と女子生徒2名、高校3年生の男子生徒1名に研究協力を得た。

2.使用した心理検査

ASD群を操作的に定義するために、ASDのスクリーニングのための質問紙であるASSQへの回答を担当とSCに依頼した。22点以上をASD群とした。各生徒に対しては、内的体験を検討するために口法、LMT-Holeを実施した。

III.結果と考察

1.ASSQが不一致だった事例

辻井・内田(1999)は、ASDの口法の特徴として、Rが少ない、Fが多い、MやFMが少ない、Cが少ない、形態水準が悪い、CRが狭い、Pが少ないことを挙げている。

表1は各事例の口法の結果である。

表1 各事例の形式分析の結果

	事例A	事例B	事例C	事例D	事例E
Total Response	53	10	4	8	21
Reject	0	0	6	4	0
T/ach	5.2"	46.6"	21.3"	2'59"	45"
T/c	4"	51"	14"	2'04"	33"
Av.	4.6"	48.8"	19.5"	2'24"	39"
Tur%	54.7%	0%	50%	0%	33%
A%	28.3%	30%	50%	25%	57.1%
H%	39.6%	40%	0%	12.5%	19%
M:ΣC	15:5	3:1	0:0	0:1.5	2:0.5
H+A:Hd+Ad	34:2	7:0	2:0	1:1	12:2
M:FM	15:4	3:1	0:0	0:0	2:4
FC:CF+C	5:2	0:0	0:0	0:1	1:0
C.R	18	6	4	6	4
W:M	7:14	5:3	1:0	0:0	4:2
VIII・IX・X/R	47.2%	30%	0%	25%	28.6%
F+	52.8%	60%	100%	75%	42.9%
F+%	60.7%	67%	25%	66.7%	77.8%
R+%	54.7%	80%	25%	62.5%	71.4%
newF+%	52.4%	66.7%	25%	71.4%	78.9%
P	3	3	0	0	2
ASSQ(担任)	26	7	17	4	14
ASSQ(SC)	8	28	43	4	18

事例 A (男子, 高校 3 年生) の口法の結果は, 辻井・内田 (1999) が示す ASD の形式分析の特徴とは一致しなかった。思考・言語カテゴリーは 39 と多量にスコアされ, その内訳を見ると, Defensive Attitude が 5 個, Fabulization Response が 17 個, Arbitrary Thinking が 5 個と多くスコアされている。神経症水準の防衛が働きながらも, 恣意的な思考に陥り, 現実吟味力が低下することが推測できる。

事例 B (男子, 中学 3 年生) の口法の結果も, 辻井・内田 (1999) の示す ASD の特徴とは一致しなかった。M は 2 つあるが, 「向き合っている」と運動性に欠ける反応のみである。H/が多く, 他人からの目を強く気にしているようで, C が 0 と情緒性が強く統制されている。思考・言語カテゴリーを見ると, perplexity が 2 つスコアされている。自分の反応に自信がないために, 検査者に保証を求めていることが窺える。

事例 C (男子, 中学 3 年生) の口法の結果は, 辻井・内田 (1999) が示した ASD の口法の特徴と一致していた。思考・言語カテゴリーを見ると, incapacity of explanation が 3 つスコアされた。

畑中 (2013) は, 「不確定反応」と定義した反応から, 発達障害に共通して見られる, 対象への焦点付けの弱さを示した。口法のプロットは曖昧な刺激であり, その刺激に対しての認知も曖昧だったため説明することが出来ず, incapacity of explanation がスコアされたと考えられる。

口法の特徴からは, 事例 A と事例 B は ASD とは考え難く, 事例 C のみ ASD ではないかと考えられる。

2. 事例 C と事例 D の比較

ASSQ において, 担任と SC に ASD ではないと評定が一致していた事例 D (女子, 中学 3 年生) の口法の結果もまた, 辻井・内田 (1999) が示す ASD の口法の特徴を示していた。行動レベルでは ASD 群と非 ASD 群と評定が異なった事例 C と事例 D であったが, 形式分析にのみ着目すれば, 両事例とも ASD の口法の特徴を示していた。しかし, 思考・言語カテゴリーを見ると, 事例 C にのみ incapacity of explanation がスコア

された。また, 2 人の LMT—Hole には大きな違いが見られた。事例 C の LMT—Hole は描かれたアイテムが羅列的であったのに対し, 事例 D では構成が取れていた。

熊谷 (2017) は ASD の特性として, ある刺激が入り込むと, 感覚の枠がいっぱいに広がり, そのまま停留すると述べている。川崎 (2018) は構成放棄型の描画について, 全てのアイテムに対して埋没する視点で反応する構図であると説明している。このことから, アイテムが教示されると, その瞬間は提示されたアイテムで感覚の枠がいっぱいになり, そのアイテムに没入することになるため, 前後のアイテムとの脈絡がなく, 構成がまとまらないままに描かれると考えられる。

3. 「穴」に投映されるもの

高橋 (2016) によると, 「穴」は他のアイテムより強い情緒刺激を与え, 想像性を刺激するアイテムである。LMT の 10 個のアイテムには象徴的な意味がある。各アイテムが象徴しているイメージが自分の中で賦活されなければ, Reject されるため, 想像力以外の影響が関与していることが考えられる。想像性を刺激する「穴」というアイテム自体には描き手のイメージが強く投映されるだろう。事例 C を除く 4 事例は, 「穴」に具体的なイメージを投映することができていた。事例 C が具体的なイメージを投映することができなかったのは, ASD が故の想像力の障害があるためと思われる。また, ASD の内的体験の空虚であり, その空虚さが, イメージがない「穴」として表現されたとも考えられる。

4. 口法と LMT—Hole のテストバッテリー

ASSQ によって評定が一致しなかった 3 事例同士の比較と, 形式分析が類似している ASD 群と非 ASD である 2 事例を比較することで, 思考・言語カテゴリーを活用した口法と LMT—Hole のテストバッテリーによって, ASD かどうか判断できる可能性を示唆した。目に映る行動レベルでは評定が一致しなかった事例もあったことから, 投映法によるテストバッテリーは ASD のアセスメントにおいて重要な役割を担うと考えられる。